

氏 名	李 愛 利 娥
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学 位 記 番 号	人 博 第 104 号
学位授与の日付	平成 12 年 5 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 文 化 ・ 地 域 環 境 学 専 攻
学位論文題目	社会変動下にある少数民族の適応に関する実証的研究 ——カザフスタンにおける朝鮮人社会を事例として——

論文調査委員 (主 査) 教授 足 立 幸 男 教授 山 田 誠 教授 蘭 信 二

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、旧ソ連邦体制が崩壊しカザフスタンが独立するというきわめて急激な社会変動下を少数民族が生き抜く過程を、カザフスタンの少数民族の一つである朝鮮人社会を事例として、実証的に解明しようとしたものである。そもそもカザフスタンに朝鮮人が本格的に住むようになったのは、1937年のスターリンによる沿海州からの朝鮮人強制移住にさかのぼるが、本論文は、それ以前の朝鮮半島から沿海州への朝鮮人の移住、沿海州からカザフスタンへの強制移住という、いわば一世紀にわたる移住の歴史を生き抜いてきた朝鮮人社会の少数民族としてのありようを、中央アジアの朝鮮人に固有な出稼ぎ請負農業とも言えるゴボンジル（朝鮮語で「相互に助け合う」という意味）の分析を通して、丹念に描き出している。

第1章では、沿海州における朝鮮人社会の変容の過程を、(1)出稼ぎから定住へと推移するにつれての階級分化の進展、(2)ロシア革命と朝鮮独立に関する立場の違いに起因する多様な政治集団への分化、(3)ソビエト体制の下で少数民族として再び抑圧的な状況におかれるようになった朝鮮人の民族的アイデンティティの保持を目指す活発な活動の展開、という三つの歴史的事実に着目しつつ、現地でのインタビューと帝政ロシア時代の人口調査などの原資料に即して、ダイナミックに表現している。

第2章では、沿海州から中央アジア地域への朝鮮人強制移住（18万人）政策の背景とその実施状況を、スターリンの少数民族政策、1930年代の国際関係（とりわけ朝鮮独立運動、スターリンの対日宥和政策）、ソ連にとっての沿海州の戦略的重要性などに着目しつつ、子細に検討している。

続いて、第3章と第4章では、ゴボンジルの具体的形態、意義、成立の背景を、入念なフィールドワークと歴史資料の調査・発掘を通して、明らかにしている。ずさんな強制移住政策によってカザフスタンへと追いやられた朝鮮人は、敵性民族として、居住地が制限され、農業の適地へと再移住することは望むべくもなかった。そのため、朝鮮人は未曾有の生活苦を強いられることとなったが、強権的なソビエト体制を前にしては抵抗も容易ではなく、体制に順応する他に道はなかった。そうした中から生き残りのための具体的方策として生み出されたのが、ゴボンジルという独立採算制の農業形態であった。居住地が制限された朝鮮人は、現状を打開するために出稼ぎで農業適地を探しだし、親族ネットワークにもとづく農業集団を組織して、抑圧的な体制に巧みに順応した。特筆すべきは、朝鮮人社会に固有な農業形態としてのゴボンジルが、様々な地域のホルホーズやソフォーズと請負契約を結び、そこで数年間出稼ぎをして私的な利益を上げるという、すぐれて資本主義的なシステムだということである。ソ連邦の農業生産体制の矛盾が露呈しその穴埋めが要請されていたことも、ゴボンジルの発展にとって好都合であった。スターリンの死後、朝鮮人への居住地制限は撤廃され、一部の朝鮮人は周辺国へと再移住したが、大半は都市近郊へと移住していった。それは、都市近郊が子弟の教育とゴボンジルの実施に適していたからである。

だが、ゴボンジルの成功は、体制への過剰適応と表裏の関係にあった。強制移住に象徴されるソ連邦の朝鮮人への抑圧的政策は朝鮮人の体制への同化を強いることになり、ソ連邦における社会経済的成功とは裏腹に朝鮮人の民族的アイデンティ

ティは弱体化した。カザフスタンの独立は新たな体制と民族関係を生み出した。ゴボンジルと都市専門職への就業によってすでにソビエト体制に順応し地歩を高めてきた朝鮮人にとって、新たな状況への対応は容易ではなかったが、彼らは、カザフ民族主義を刺激せず、カザフ人と競合しない農業、商業の経済領域へ転進するという道を探りつつある。第5章では、そのプロセスを鮮やかに描き出している。

以上、本論文は、帝政ロシア、ソ連邦、カザフスタンという異なる社会体制を、少数民族としての朝鮮人が、その文化的伝統と民族的ネットワークを適応の戦略として巧みに生き抜いてきた、その過程を、精力的なフィールドワークと一次資料に基づいて解明しようとしたものである。

論文審査の結果の要旨

旧ソ連邦は世界有数の多民族国家のひとつであったが、アメリカ合衆国やヨーロッパと比較し、これまで少数民族に関する実証的な研究は少なかった。とりわけ中央アジアのカザフスタンは、スターリンの強制移住によって旧ソ連邦でも少数民族が最も多く住む地域でありながら、社会体制の壁にはばまれ、その研究はほとんど行われてこなかった。旧ソ連邦が崩壊しカザフスタンが独立した今まさに、少数民族研究は緒についたばかりと言える。本学位申請論文は、カザフスタンにおける少数民族、とりわけ朝鮮人社会に関する研究のフロンティアを切り開くものと位置づけられよう。

本学位申請論文の第1の意義は、計8回延べ11ヶ月にわたる綿密なフィールドワークにもとづいて、強制移住後から今日におよぶカザフスタンの朝鮮人社会のありようを最も象徴的に表すゴボンジルを「発見」し、その歴史的経緯および構造と特質を実証的に明らかにした点である。その存在それ自体は中央アジアでは周知のことであったが、これまでその重要性が看過されてきたゴボンジルについて、本論文は以下のような知見を提示している。すなわち、遊牧社会の中央アジアに定着農業を強制したうえに形式的なノルマ達成を求めたソ連邦の政策的矛盾と、強制移住後の生活苦と居住地制限という抑圧的状况にあえぐ朝鮮人の利害が一致したことによって、ゴボンジルが生成・発展したこと、それが社会主義体制下においていち早く確立され今日まで継続されてきたすぐれて資本主義的な農業システムであること、沿海州や旧満州地域で朝鮮人が広汎に行ってきた出稼ぎ農業の伝統を継承し親族関係を単位とする伝統的・民族的なものであること、である。

本学位申請論文の第2の意義は、カザフスタンの朝鮮人社会を長期的スパンでとらえる歴史的視点により、従来の研究に厚みを加えたという点である。とりわけ、帝政ロシア時代の人口調査や1928年の朝鮮人の農業協同組合に関する資料を用いて、強制移住前の沿海州における朝鮮人の状況を初めて明らかにした点、これまで閲覧できなかった極秘文書から、強制移住直後の朝鮮人社会、朝鮮人コルホーズの配置状況や再移住実態を明らかにしている点などは、特筆に値する。

第3の意義は、中央アジアの朝鮮人が、一面において、強制移住の教訓から民族主義的な活動や生き方を避け、他の少数民族以上にソビエト社会に順応し、その民族的な独自性を消失しているように見えつつも、他面においては、ゴボンジルに象徴されるように、体制の枠内ではあるが、民族的な伝統を巧みに活用して新たな状況を主体的に切り開いてきた、そのプロセスを解明した点である。少数民族としての朝鮮人が多数者による抑圧を単に受動的に受容してきたのではなく、穏健かつ巧妙な方法で体制への抵抗を試みてきたという視点は、極めて示唆に富むものと言えよう。

事例の発見、研究の着眼点という点で、本論文には、瞠目すべきオリジナリティーがある。加えて、周到なフィールドワークと一次資料の検討・発掘を通して事実を明らかにしようとするその旺盛な実証精神は、高く評価されてしかるべきである。ただ、論文の完成度それ自体については、いまだ改善の余地がある。たとえば、(1)本論文を貫く方法論的な視点が明確でないこと、(2)先行研究の検討が必ずしも十全なものでないこと、(3)少数民族の比較研究への展望が不足していること、などである。

とはいえ、すでに指摘したように、本論文には、これらの問題点を補って余りあるほどの意義とオリジナリティーがあり、学界での今後の活動が大いに期待される。このことは、本学位申請者が、いまだ大学院生でありながら、すでに国際学会での報告や国内外の学術雑誌への掲載を度々認められてきたことから明らかであろう。また、本学位申請論文は、既成の学問領域を越える新しい文化・社会環境研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻文化・社会環境論講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士(人間・環境学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成12年3月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。